

「アホみたいな国のアホみたいな政治家」という吉田所長の的確な遺言

8月18日に「吉田調書」を入手した産経は、一面トップの『『全面撤退』明確に否定』の大見出しで「吉田調書」の内容を報道し、吉田所長には「所長命令に違反」の認識はなかったとして、真っ向から朝日の5・20報道を否定した。

《吉田氏は聴取担当者の「例えば、(東電)本店から、全員逃げろとか、そういう話は」との質問に「全くない」と明確に否定した。細野豪志首相補佐官(当時)に事前に電話し「(事務関係者ら)関係ない人は退避させる必要があると私は考えています。今、そういう準備もしています」と話したことも明かした。

特に、東電の全面撤退を疑い、15日早朝に東電本店に乗り込んで「撤退したら東電は百パーセント潰れる」と怒鳴った菅氏に対する評価は手厳しい。吉田氏は『『撤退』みたいな言葉は、菅氏が言ったのか、誰が言ったのか知りませんが、そんな言葉を使うわけがない』などと、菅氏を批判している。

(略、朝日の「所長命令に違反 原発撤退」記事に対して)ところが実際に調書を読むと、吉田氏は「伝言ゲーム」による指示の混乱について語ってはいるが、所員らが自身の命令に反して撤退したとの認識は示していない。

また、「退避」は指示しているものの「待機」を命じてはいない。反対に質問者が「すぐに何かをしなければいけないという人以外はとりあえず一旦」と尋ねると、吉田氏が「2F(第2原発)とか、そういうところに退避していただく」と答える場面は出てくる。》

《「私にとって吉田(昌郎)さんは『戦友』でした。現(安倍)政権はこの(吉田)調書を非公開としていますが、これは特定秘密にも該当しないし、全面的に公開されるべきです」

菅直人元首相は月刊宝島8月号でのインタビューで、東電福島第1原発の元所長、吉田氏を自らの「戦友」だと述べている。

だが、産経新聞が入手した吉田調書を読むと、吉田氏側は菅氏のことを「戦友」とは見えていない。むしろ、現場を混乱させたその言動に強い憤りを覚えていたようだ。

例えば、平成23年11月6日の聴取では「菅さんが自分が東電が逃げるのを止めたんだみたいな(ことを言っていたが)」と聞かれて答えている。

「(首相を)辞めた途端に。あのおっさんがそんなのを発言する権利があるんですか」

「あのおっさんだって事故調の調査対象でしょう。辞めて、自分だけの考えをテレビで言うというのはアンフェアも限らない」

菅氏は同年8月の首相辞任後、産経新聞を除く新聞各紙やテレビ番組のインタビューに次々と応じ、自身の事故対応を正当化する発言を繰り返していた。

菅氏が自分も政府事故調の「被告」と述べていたことから、吉田氏は「被告がべらべらしゃべるんじゃない」とも指摘し、事故調が菅氏に注意すべきだとの意見を表明した。

菅氏だけでなく、当時の海江田万里経済産業相や細野豪志首相補佐官ら菅政権の中枢にいる政治家たちが、東電が全面撤退する意向だと考えていたことに対しては「アホみたいな国のアホみたいな政治家」とぼつさり切り捨てている。

その菅氏は今年7月24日付のツイッターで、吉田調書についてこう書いた。

「吉田調書など(で)当時の状況が明らかになり、発生翌朝現地で吉田所長から話を聞き撤退問題で東電本店に行った事も理解が増えています」

吉田氏の肉声はこれとは食い違う。政府事故調の聴取(23年7月22日)で「(菅氏は)何のために来るということだったんですか」と質問され、こう突き放している。

「知りません」

「行くよという話しかこちらはもらっていません」

さらに必死で作業を続けている所員らに菅氏が激励もせずに戻っていったことを証言している。

菅氏が震災発生4日後の15日早朝、東電本店に乗り込んだことにも冷ややかだ。(引用者挿入 同一頃、現場でまさに死と向き合っていた吉田氏は)7月29日の聴取で、テレビ会話を通してみた

菅氏の東電本店での叱責演説についてこう語っている。

「何かわめいていらっしゃるうちに、この事象（２号機で大きな衝撃音、４号機が水素爆発）になっちゃった」》

記事は事故調が平成２４年７月の報告書で、首相官邸サイドからの介入について、「介入は現場を混乱させ、重要判断の機会を失し、判断を誤る結果を生むことにつながりかねず、弊害の方が大きい」と総括していることや、《官邸内で海江田氏や細野氏ら政治家や東電幹部、^{まだらめ}斑目春樹元原子力安全委員長らが「勉強会」を開き、そこで出た疑問を現場に電話で問い合わせていたと聞き》、吉田所長が「何をもってこの国は動いていくんですかね。面白い国ですね」と語ったことも載せている。

以上は一面記事であり、二面記事でも朝日の主張する「撤退」問題について、経過を記している。《「吉田調書」の文面からは、東京電力福島第１原発にいた所員らの９割が１０キロ南の福島第２原発に一時退避したことを、吉田昌郎氏が「正しかった」と認識していたことが分かる。朝日新聞は５月２０日付朝刊で、吉田調書に基づき「所員らは吉田氏の待機命令に違反し、第２原発へ撤退」と報じたが、第１原発の複数の元所員は産経新聞の取材に「命令違反ではない」と明言する。吉田調書と関係者の証言から経緯を追った。 （「吉田調書」取材班）

第１原発所員が第２原発へ退避したのは、東日本大震災４日後の平成２３年３月１５日午前７時ごろ。第１は最大の危機を迎えていた。

前日の１４日夜には、第１原発２号機への注水に使っていた消防車が燃料切れで動かなくなったことで、原子炉格納容器が壊れ、多数の所員に危害が生じることが懸念された。

テレビ会議映像では、当時東電本店（東京都千代田区）にいた幹部が１４日午後８時１６分ごろ、「１Ｆ（福島第１）にいる人たちみんな２Ｆ（福島第２）に避難するんですよ」と発言。緊急時対策室を第２へ移す検討を始めていたことが分かっている。

１５日午前５時半ごろには、菅直人首相（当時）が東電本店を訪れ、「撤退したら東電は１００パーセントつぶれる。逃げてみたって逃げ切れないぞ」と絶叫した。このとき、テレビ会議映像を見た元所員は「誰が逃げるのか」と反発を覚えたと振り返る。

午前６時１４分ごろ、２号機の方から爆発のような音が聞こえ、原子炉圧力抑制室の圧力がゼロになったという報告が入った。

格納容器破壊の懸念が現実味を帯び、複数の元所員によると、吉田氏は「各班は最少人数を残して退避」と命じ、班長に残る人員を決めるよう指示、約６５０人が第２原発へ退避した。

調書によると、吉田氏は「本当は２Ｆに行けと言っていないんですよ。福島第１の近辺で、所内にかかわらず線量の低いような所に１回退避して次の指示を待てと言ったつもりなんです」と命令の行き違いがあったことを示唆している。朝日新聞は、吉田氏のこの発言などから「命令違反」と報じたとみられる。

しかし、調書で吉田氏は「考えてみればみんな全面マスクをしているわけです。（第１原発で）何時間も退避していたら死んでしまうよねとなって、２Ｆに行った方がはるかに正しいと思った」と、全面マスクを外して休息できる第２原発への退避が適切だったとの認識を示している。

当時、現場にいた複数の元所員も産経新聞の取材に「命令違反」を否定。中堅の元所員は「第１原発にいた所員は、退避するなら第２へという共通認識があった。それが吉田氏の命令違反であるはずがない」と証言した。

当時、第１原発にとどまったのは吉田氏ら６９人。１５日昼ごろには第２に退避していた多数の人が戻った。

東電関係者も「当時自家用車で第２へ退避した人も多く、逃げるのであればそのまま避難所にいる家族のもとに行っているはずだ。しかし、彼らは第１へ戻ってきた」と話した。》

ネットではさらに、《菅氏らが「第１原発からの撤退」との疑心暗鬼にとらわれていたことを問われると、吉田氏は「現実として逃げていない」と否定した》ことや、《「第１原発では乾パンや水しかなく環境は日に日に悪化しており、第１のどこかに待機するというのはありえない」と語る。吉田氏の命令は第２への退避と受け止めたという。》そして、《吉田氏と一緒に現場にとどまったベテランの元所員は「（第１に）残りたいという人ばかりだった。第２までの道は崖崩れの危険があったから、退避した人から『第２に無事に到着した』という連絡があったときには、第１に残った人は『ああよかった』とお互いに喜び合った」と語る。》ということが追加されている。